訳者あとがき

本書は、Jacques-Alain Miller (Sous la direction de), *l'Autre méchant : Six cas cliniques commentés*, Navarin, 2010. の全訳である。これは二〇〇九年二月一日にパリで開催された、世界精神分析協会（Association mondiale de Psychanalyse：ＡＭＰ）主催の症例検討会を記録したものである。

はじめに

フランスにはジャック・ラカンを臨床の礎とする「ラカン派」精神分析のグループが複数あるが、その中でもっとも精力的に活動しているのがエコール・ドゥ・ラ・コーズ・フロイディエンヌ（École de la Cause freudienne：ＥＣＦ、フロイト大義派とも訳される）である。このＥＣＦをはじめＥＣＦと考えを同じくするヨーロッパやラテン・アメリカなどの七つのラカン派精神分析団体が加入しているのが、この検討会を主

催したＡＭＰである。ラカンの娘婿でありラカンから講義録『セミネール』の編集を任されたジャック＝アラン・ミレールがこのＡＭＰを主導している。ＥＣＦやＡＭＰでは大小さまざまな臨床検討会が催されており、とりわけ年に一度の大きな症例検討会のひとつが、この大会である。

１　症例検討会について

症例検討会は以下の仕方で為される。まず大会の二週間前に症例のテクストがまとめて参加者に送られ、各自読み込んで当日を迎えることになっている（本書の前半にテクストは収録）。検討会は午前十時から十三時までと、昼休憩をはさんで、午後十五時から十八時まで続けられる。二〇〇九年の場合は、パリ五区のミュチュアリテ会館に世界各地からおよそ七百名の分析家たちが参集した。一時間ごとに、原則としてひとつの症例の概略の説明が行われ、これは症例提供者とは別の者が担当する。続いて症例提供者と指定討論者ら、ジャック＝アラン・ミレールを中心に討論がなされ、時間に余裕があればフロアからの質問を受けつける。

この検討会は「会話」と名づけられており、テーマが設定され、それを討論するのにふさわしい症例が集められる。大会のテーマも毎年異なっており、その年の精神分析を取りまく状況が反映されることが多い。例えば二〇〇五年は「精神分析の迅速な治療効果」がテーマだったが、それはフランスで「エビデンス」を掲げる勢力により精神分析の実践が脅かされる情勢に陥ったからであったし、二〇一五年は「現代的主体」というテーマが選ばれたが、これはいわゆる「性の多様性」に関する訴えをもつ主体に対し、ラカン派精神分析家たちがどのような実践を行っているかを確認するためであった。言わずもがなかもしれないが、ラ

カンが講義の中で練り上げた主要な概念を整理しその変遷を辿ることで、ミレールは例えば「現実的無意識（l'inconscient réel）」を始め「語る身体（corps parlant）」、「話存在（parlêtre）」などの概念をラカンから取り出した。今日分析家たちはそれらを前提にして議論を組み立てているが、私たちが忘れてはならないのは、ラカンやミレールが地道で莫大な（この語は決して大袈裟ではない）臨床的実践活動に携わっていたからこそ、これらの概念は導き出されたのだということである。

そして個々の精神分析家たちによる実践や本書が収録する症例検討会等においてそれらの概念の練り上げや検証は、今も引き続き行われている。

なお当日登壇の分析家たちは、そのほとんどがＥＣＦとＡＭＰ両方に所属の精神分析家たちである。その主な登壇者たちを挙げると、フランスで在住し活躍している分析家としては、ジャン＝ダニエル・マテ、クリスティアンヌ・アルベルティ、フィリップ・ドゥ・ジョルジュ、キャロル・ドゥヴァンブルシ＝ラ・サーニャ、エリック・ローラン、ジャン＝ロベール・ラバネル、ベルギーではアレクサンドル・スティーブンス、スペインでは、ミケル・バッソル、イタリアでは、アントニオ・ディ・チャッチャ、ブラジルではパオロ・シクエラとなっている。

2　大会のテーマ「底意地の悪い〈他者〉」について

二〇〇九年の大会のテーマは「底意地の悪い〈他者〉」である。大会直前には、言わばプレミアとして、ラカンが博士論文を執筆する際に参照したドイツ・フランス精神医学についての勉強会が開催されている（*La Cause Freudienne*, n° 73 と n° 74 に収録）。ミレールはそこで、この「底意地の悪い〈他者〉」という語は

「パラノイア（paranoïa）」の概念よりも広大であり、厳密なものではないと述べている。本書でも同様である。私たちはここで、概念的に規定されてはいない「底意地の悪い〈他者〉」を、そのさまざまな出現の仕方を通じて目の当たりにすることになる。

とはいえ、ミレールは本書でその目印を打ち立てている。それに基づき、ごく簡単にこの語が持っている射程を見ておきたい。

まず、ラカンにとって「パラノイア」はあらゆる主体の原始的状態である。一九四六年に彼は、自我はパラノイア的な構造を持っているということを示すため、「パラノイア的認識（connaissance paranoïaque）」という語を発明する。それは鏡像段階から導き出される帰結である。

鏡像段階において幼児は、鏡像を見ることによって自我（身体の統一性）を初めて獲得する。だが、つねに鏡像のほうが自分よりも先んじているため、鏡像は自分を騙取するものとしても現れる。幼児は鏡像に対しアンビバレントな感情を向けざるを得ない。ラカンによれば、あらゆる主体は、このような憧れと攻撃性との揺れ動きのなかに、つまり、想像的な関係のなかにその基礎を持っている。その帰結として、人間の認識は「パラノイア的認識」とならざるを得ない。

そして、この想像的な関係（自己愛的であり、葛藤的な関係）を安定させ、正常化するのが、〈父の名（Noms-du-Père）〉の機能であるとされる。主体が象徴界（言語の世界）に参入する際、〈父の名〉の機能によって去勢を受け入れ、象徴界に誕生することができれば、その主体は神経症となる。もしそれとは別の在り方で象徴界に参入するならば、主体は精神病、もしくは倒錯となる。

さて、ミレールは、ラカンが描き出した象徴界（シニフィアン連鎖）の特性から出発し、「底意地の悪さは基本的な意味作用である」と述べる（「会話」開始の冒頭部を参照）。彼はそれを三つの段階に分け説明す